

■ 書 評



さまよえる自己——
ポストモダンの精神病理

内海 健 著
筑摩書房 2012年5月
288頁, 定価 1,680円

今年6月、東京藝大で開かれた日本病跡学会を束ねたのは、本書の著者である精神病理学者の内海健氏である。同大会には、科学、哲学、美術から文学に至るまで多彩なジャンルの先達が集い、「パトグラフィの越境」の大会テーマにふさわしい発表が行われた。休憩時間や懇親会ではミニコンサートなどのサプライズもあり、氏の学識の広さや細やかなセンスが随所に感じられた。

著者はこれまで、3冊の統合失調症論と2冊のうつ病論を世に問い、また、初学者に向けて語った佳作『精神科臨床とは何か』でも、平易な語り口のなかにも氏らしい明晰な洞察を光らせている。

本書は、著者がここ数年にわたって発表してきた多数の論文を俯瞰するような内容を、数世紀にわたる歴史的な壮大さと一分の隙もない論理の肌理細やかさをもって一冊にまとめあげたものである。一貫して論じられるのは、自己というものが、どのように成り立っているのかということである。ひとまず、時代精神のなかでの自己と病理の構造を究明しようという著者の試みが、自己をすでに自明のものとして扱う脳科学とは一線を画していることに留意しておきたい。

それでは、本書の全体の構成を損ねない程度に、ポイントをおさえてみようと思う。

- ・導入部では、時間の流れのなかで、自己がどのように生成してくるかが考察される。かの有名なベンジャミン・リベットの実験の解釈を通じ、「自己とは他者に触発されて立ち上がる」ことが確認される。(第1章)
- ・さらに、そうした前提のもと、他者から自己に向かうベクトル(=志向性)の原型が、抱かれ、見つめられ、呼びかけられるというミニマムな局面において仔細に検討される。(第2, 3章)

- ・中盤では、「ピュシスとノモス」あるいは「神話と歴史」が対峙している構図において、いかにして自己が成立しているのかが論じられる。(第4章)
- ・ついで、古典主義時代の哲学者デカルト・ニュートン・カントの思想が取り上げられ、その後、いわゆる「神の死」に触れつつ、思想的な視点から自己の起源を探ることが試みられる。そして、近代的な自己というのは、「寄る辺なさに耐えること」と「自分で自分を律すること」という課題を負っていることが結論される。(第5章)——ここに、内海氏の論考の神髄があるといえるだろう。
- ・後半に突入すると、近代的な精神の病であるメランコリー(=内因性うつ病)、スキゾフレニア(=統合失調症)に接続される。いずれも、自己が立ち上がる局面に想定されていた他者からの強大なベクトル(=志向性)が問題となっているとされる。それらは「分離のノモス」、「自律のノモス」である。すなわち、それぞれの病理の根源には、われわれの経験する次元にはない「超越論的トラウマ」とも呼ぶべきものが見出されるのである。(第6, 7章)——ちなみに、精神病理学になじみのない方は、ここから入門するとよいかもしいない。本書で扱われているのは脳科学の手が届かない「起源」や「超越」といったものであること、そして、それらが臨床的に重要なテーマであることなどが十分に理解できると思われる。
- ・そしてついに、ここまでの緻密な論考が、本書の副題でもある「ポストモダンの精神病理」に収束する。無意味や無根拠といったニヒリズムがはびこる時代には、一体何が、どのような自己が必要なのかが推察される。(第8章)

本書を読み終えたわれわれは、意味も根拠もないポストモダンの時代を生き抜くためには、一体何が必要なのだろうか立ち止まって考えさせられる。著者は、「決断という飛躍」と「引き受けること」が圧倒的に欠けているのだと説き明かし、本書の末尾において、「にもかかわらずの精神」を静かに主張しているが、果たしてそれだけでよいのだろうか。もしかしたらまだ足りないものがあるのかもしれない。こうした日々新たなる思索に、読者はそっと誘い出されることになるだろう。

われわれは、内海健という他者からやってくるスピリットを、心を開いて真摯に受け止めることから始めてみようではないか。

(田中伸一郎)